贋作幽霊温泉

tontokaimo39

贋作幽霊温泉

「恭一、青葉温泉覚えてる？」
「うん？ああ、あの狛犬の温泉か」
「そう、また行けるわ、今度は財布の中身を心配しないでね」
「何だと、どう言うことだ？」
「今度の学園祭コスプレ大会なの、優勝者はペアで青葉温泉ご招待」
「何、学園祭の賞品が温泉招待だと…」
「フフフ実はね、B商店街それからM大との共同開催、商店街を歩行者天国にしてね、そこでコスプレを競うわけ、温泉招待は商店街の提供よ」
「なるほどそれなら分る、しかし夕子、また行けると言っても優勝したらの話じゃないか」
「あら私が優勝しないと思うの、T大のマドンナで、都内美人女子大生コンテスト第一位の私が」

「何、いつの間にそんなコンテストに出たんだ？」
「フフフ、そんなコンテストがあればと言うことよ」
「おいおい、自惚れもそこまで行くともう天晴としか…」
「フフフ、ねえ恭一、私何になろうかしら？」
「夕子はミス研だろう、それならホームズとかポアロだが、夕子は女性だからミスマープル」
「バカ、ミス研だから即ホームズなんてそれ発想力の乏しさの見本じゃないの、それに私は恭一のようなお年寄りじゃないわ」
「一言余分だ、それなら夕子に相応しく巴御前なんかどうだ」
「何、それ？」
「木曽義仲の彼女だ、荒馬に跨り長刀を縦横に操って群がる敵をバッタバッタと！日本最強の女武将」

「こら！このおしとやかな私がどうして荒馬に跨るのよ、そうね、あの時代なら私はまあ静御前、静や静、静のおだまき繰り返し・・・」
「よく言うよ、だがそれなら俺は義経だな」
「何言ってんの、のび太じゃない」

「えっ！夕子さんのクレオパトラ！それ見逃したら一生悔やまれる、ねえ宇野さん！」
と言うことで、一課はB商店街に繰り出した、幸い事件もなく、当然万一の対策も備えた上でのことだが、課長までご出馬だから、会場の整理にあたる交通班からかなり白い目で見られたのはまあ仕方がない、ミス研だからホームズと言うのと美人だからクレオパトラと言う発想のどこに違いがあるのかはわからないが、「私って、やはりクレオパトラか楊貴妃かと言うところね」と言うのだからいい気な

ものだ。
　やがて幾組かが通り過ぎる、T大は商店街の入り口から、M大は外れからスタート、互いに道の左右両側を進んで円のように一周、その間にプラカードに描かれた番号を投票してもらって優劣を決めようと言うわけだ、コスプレと言っても要するに仮装行列、仮装行列は私たちの学生時代もよくやった、ただしその頃はボール紙の張りぼてや新聞紙の羽織と陣袴、滑稽で馬鹿らしくて貧乏臭く、いやよく言うならどこか哀愁が漂って…ところが現在は違う、コスプレのためのグッズを扱う専門店まであるのだからみなそれぞれによく化けている。観客は女高生と女子中学生が多い、がそれ以上の年齢となると男性の方が圧倒的に多いのはどう言うわけだろう。

「キャア！かわいい！」
と言う声が上がった、直子だ、おおっ！確かにかわいい！真っ白な服と帽子、そして白い靴、胸に付けた花と腰と帽子のりぼんだけが赤で、白に統一した服装と見事につりあっている、直子はまだ未成年、それでももう大学生だ、ところがどう見ても中学生以上には見えない、まるで人形のようにかわいいのだ、ううん！これは優勝の有力候補とプラカードを見ると「白雪姫」と書いてある、なるほどそれで白か、ところが直子が引っ張っているのはカタカタ！？…車が付いていて引くと上の小鳥がカタカタと餌を啄ばむような動きをする幼児の玩具だ、おいおい、白雪姫のお供は小人だったはず、それがなぜカタカタなんだ、うん？これにはかなり高度な哲学的な思考力が…と、私に気づいた直子はにっこりと笑って手を振った、そのしぐさがまたかわいいの

で一課は大喜び、みな一斉に手を振って応える、おじさんたちのこの騒ぎに、周りの女高生たちがあきれた顔をして眺めている、おいおい直子、一課をみんなロリコンにしてしまうなよ。

続いて

「凄い！」

と言う声が上がった、夕子だ！ほ、本当に夕子なのか…これが夕子！

「宇野さん、夕子さんですよ！」

と騒ぐと思っていた原田が、声も出さずにポカンとして眺めている、金色の飾りを付けた真っ直ぐな黒髪を肩までたらし、緑のアイシャドウに真っ赤な唇、それが後は何も塗っていない夕子の顔の肌色に実によくマッチして、正にエジプトの壁画から抜け出してきた女性のようだ、すましている顔には威厳があり、何か神秘的な雰囲気さえ感じさせる、ううん

これは凄い！直子といい勝負、二人とも明らかに他より一歩も二歩も勝っている、直子は中世風の夕子はエジプトの衣服を身に付けているはず、（とは言えそれがどんなものかは知らないが）それでいて仮装ですと言う不自然さを感じさせず、実在の人物が今現れたかのように見えるのだ、「私が優勝しないと思うの」と言った夕子の言葉は、うぬぼれだけでは無かったようだ…

ゆっくりと歩いていた夕子は、私たちの方に向きを変え静々と近寄ってくる、と思った途端、ぱっと私に抱きついて

「おお！シーザー！」

「こ、こら！お、おい夕子…」

「ワッ！」

周りから一斉に歓声が上がり拍手まで起こる、やってくれたな夕子！月並みの表現だが穴があったら

入りたいとはこのことだ。
ちょっと含み笑いを残した夕子は、またすまして静々と去って行く、歓声がいつの間にか笑い声に変わった、女高生たちだけでなく一課の連中、中でも原田と課長は腹を抱えて笑いこけている
「お、おい！何がそんなに可笑しんだ！」
「う、宇野さん！ハハハハ！ほ、ほっぺたに、き、綺麗なキスマークが！」
「な、何いー！」

T大とは反対側からスタートしたM大が私たちの所までやって来た、大学対抗ではなくて個人対抗だと聞いているが、こっちもなかなか凝っている
「あれっ、M大にもクレオパトラが」
と言う原田の声に見ると、なるほど夕子と同じような身なりの女性が歩いてくる、夕子は神秘的だった

がこちらは少々艶かしい、夕子は金色の杖を持っていたがこの女性は腕に蛇を巻き付けている、そうかクレオパトラは自らの身体を毒蛇に噛ませて自殺したのだ、やがてこの女性も私たちの方に向きを変えて近づいて来る…

「お、おいまた、まさか！」

と、私は慌てて身構えたが、フラフラと近寄った彼女はヨロヨロと崩れ、今度は原田の足元にそのまま倒れ込んでしまった、原田が慌てて抱き上げる、あたりはこれに驚いてシンとして見守っている、うん？自殺のパフォーマンスか、変装では夕子が上だが演技では…

「おい原田、いつまで抱いている」

「う、宇野さん、少し変ですよ！」

「何？」

見ると目がうつろだ、明らかに普通ではない！

「おい、誰か救急車を呼べ！救急車だ！」

待っていた病院の看護士たちが驚いたのは無理もない、患者のクレオパトラが処置室へ運び込まれるやいなや、今度は元気なクレオパトらが車から跳び出し続いて背広姿の中年男がのこのこと降りたのだから、M大の女性が一人同乗したのは当然だが、私は

「ほら、何してるの早く！」

と夕子に急き立てられ、わけがわからないまま救急車に押し込まれてしまったのだ。

しかし、病院側を驚かせた、このどこか滑稽な場面を笑うわけにはいかなかった、処置室から出てきた医師は首を横に振ったのだ。

「手の施しようがありません、青酸系の毒物だと思われます、青酸カリのように飲んですぐという程の

ことは無いでしょうが、口にして倒れるまでの時間はせいぜい十分、この十分の間なら何とかなったかもわかりませんが、倒れた時にはもう手遅れだったでしょう」

同乗して来たM大の女性は青くなって、ふるえながら携帯を取り出す、仲間への連絡だろう、夕子もどこかへ連絡を取っている、私は、不審死として手配するように原田に伝える。

「ねえ何かわかった？」

「それが…青山瑤子と言うM大の三回生、文学部で現代文学研究会というサークルに所属、そのサークル代表の一人としてあの大会に出ていたんだ。M大のサークルの部室、それからB商店街がM大に用意した控え場所、その双方に残っていた飲食物の全てを調べたが異状なし、まあこれは無駄な捜査だった、

と言うのは検死の結果もあの医師が言った通りだったからな、毒物を口にして倒れるまでに十分、もし部室で毒物を飲んだのなら商店街に着くまでに倒れている、控え場所で飲んだとしても、M大が俺たちのいたところへ来るまでには少なくとも四、五十分かかってるからな、彼女は原田の前で倒れたんだ」

「そうだったわね、私たちもM大のスタート地点まで行っていたから、互いにスタートしてからかなりの時間が過ぎていた…」

「となると残るのが二つ、一つはカプセルだ、カプセルなら溶けるまでに時間がかかる、しかしカプセルは自分で口に入れるのが普通だ、何かの飲食物混ぜてと言うことはまず無いだろう、じゃあ自殺か？だが自殺の原因や兆候は何も無かったという、これは家族や友人の証言が一致しているし、それにコス

プレ大会の真っ只中で自殺するわけもないだろう、誤って飲んだ、または飲まされたと言うことも考えられない、彼女は健康で、カプセルどころか錠剤も粉薬も薬などまったく飲んでいなかったと言う、カプセルでないとすると差し入れか？と思ったがこれまただめだった、行進している者に仲間が脇からジュースなどを渡していただろうあれだ、彼女が俺たちの前で倒れる十分ほど前に何かを貰って飲んだのなら…しかしプラカードを持っていた男性も、彼女の次を歩いていた者も、そんなことはなかったと言う、一体毒物は、いつどうして彼女の体内に入ったんだ？これがまったくわからない」

「彼女、実家からM大に通ってたと聞いたわ、そうだ、行進中彼女が持っていた物、今どうなってるの？」

「ああ実家が都内と言うのは、いろいろと尋ねるた

めにはよかった、地方出身だと何かと面倒だからな、遺留品は署に置いてある、個人の物は化粧品とスマホが入った小さなバックだけ、衣装などはみな借り物らしいが明日にでも一応全部を実家に返すことになっている」

「おい夕子、それは！」
「そう、青葉温泉の狛犬よ」
「それ焼き物だぜ、何かにぶっつけて壊したら…」
「あら恭一、あの話信じてるの？」
「い、いやそう言うわけじゃないが…」
「いいの、これ壊れても私何の未練も無いから」
「そんな…」
「フフフ、恭一心配なのね、ほらよく見るのよ」
「何？」
「恭一の狛犬、口を開けてるのと閉じてるの、どっ

ちだった？」
「俺のは閉じた方だ、夕子のようにおしゃべりではないからな」
「こら一言余分よ、で、これは？」
「うん？あっ閉じてるな」
「わかった？これは私たちのじゃないの」
「そうか…」
「フフフ慌てたのでしょう、これね、亡くなった青山瑤子が自分のバッグに付けてたの」
「ふうん、それをどうして？」
「警察が家に返す前に課長さんに頼んで貰ったの、もちろん遺族の了承を得てよ、彼女の家にお悔やみに行ってね、同じコスプレだったことなどを話して形見にと頼んだら、彼女のお母さんが喜んで私にくれたの」
「そうか、しかし何のために？」

「彼女のバッグ、中身がちょっと気になったの、それにほらこの狛犬…」
「そうか！口を開いた方は誰かが持っている」
「そうよ、でその誰かが…」
「もしかすると、もしかして、と言うことだな」
「そう言うことね」

「永井さん、可愛いいわねそのバッグの犬」
「これ犬だけど普通の犬ではないの、狛犬よ」
「えっ、狛犬ってあの神社の入り口にある？」
「そう、青葉温泉の神社だけで売ってるの、岸田さん知ってるこの犬のこと？」
「知らないわ、何？」
「これね、必ず二人で一対を買うの、狛犬って「ア」の犬と「ウン」の犬がいるでしょ、その一対、それを二人で分けて持ってるのよ、二人が大切に持って

ると幸せな関係が続くのだけど、どちらかが無くしたり壊したりすると二人の間はそこでおしまい」
「へえーそんな話があるの、じゃあ永井さん、貴女がバッグ付けてるってこと、それお惚気じゃないの、私には素敵な彼がいるのよって」
「違うのよ、私って美人でしょ、言い寄る男性がもう煩くて、私にはもう決まった彼がいるの、寄ってこないでと言う印よ、虫除けでなくて男除け」
「もう、よく言うわ」
「こら直子、何そのクスクス笑い？」
「だって先輩、お二人とも間違ってます、お惚気も男除けも、狛犬のことをみんなが知っていないとだめでしょう、でも夕子先輩の狛犬のお話は誰も知らないですから、他人の目にはただの可愛いアクセサリー、いい歳してるのに変な物付けてと…」
「こら、一言多い！」

「でも私、その狛犬見たことがあります」
「えっ、どこで？」
「最初はM大の図書館です、M大に高校の同級生がいるので遊びに行った時、机の上に置いてあったバッグに付いていました、可愛いなと思って」
「そう、それ誰のものだった？」
「それはわかりません、机に載せてあっただけですから」
「最初はって、直子二度も見たの？」
「はい、上原とか言う先生の部屋の本棚で」
「ああ、上原ってM大の若い準教授でしょう、私もM大に友人がいるの、彼のこと聞いてるわ、でもどうして直子がM大の準教授の部屋へ？」
「はい岸田先輩、私の友達に頼まれたのです、『私呼ばれてるんだけど、あの先生一人で行くと危ないの、前にもキスされそうになってね、一緒に行って

よ』って、私はM大生でないのにと言うと『そんなことわかるわけ無いじゃないの』って」
「で、その部屋にあったのね、その犬、口を開けてなかった？」
「そこまではわかりません、あれ、図書館で見たのと同じだなと思っただけですから」
「永井さん上原教授の噂聞いていない？」
「何？」
「うん、友達の話だけど、彼ね、どこかいいところのお嬢さんと結婚話が進んでるんだって、そのため付き合ってた青山瑤子が邪魔になって…M大で囁かれてる噂よ」
「ふうん…そんな噂が…」
「あら永井さん！いらっしゃい」
「わっ！T大の永井さんだ、歓迎歓迎、熱烈歓迎！」

「こら男共騒ぐな！我が部にも美女があまたいるのに」
「突然お邪魔してごめん、みんな明るいのね」
「ええ、まあそうでないと…」
「分るわそれ、本当に大変だったわね、青山さんお気のどくに…」
「ありがとう、で何でしょう？」
「S女大に高校時代の後輩がいるの、その子と会っての帰りなんだけど、ふと思いついて」
「ええ」
「青山さんと私同じコスプレだったでしょ、なんだか他人事のように思え無くてお悔やみに行ったのよ、彼女のお母さん喜んでくれたわ、で話し込んでいるうちに『これ瑤子が気に入っていたバッグだけどもらっていただけませんか』と言うことになったの、そんな大切なものをと断ったのだけど『家で見

てるとかえって辛いの、ぜひ』と言って」
「そうだったの」
「でも私と青山さん実際はお互いに顔も知らなかった仲でしょう、そんな私が持ってるより、本当に青山さんと親しかった方にもらってもらった方が…瑤子さんきっとそれを望んでると思って」
「そうですか、それで私たちのところへ」
「あの…それ私にいただけませんか？私瑤子先輩にはずいぶん優しくしていただいて…先輩が亡くなったってまだ信じられない！」
「ああ咲子はそうだったわね、永井さん、この子下野咲子、一回生だけど私たちの部員」
「そうなのよかった！瑤子さんきっと喜ぶわ、今持ってたらいいんだけどS女大から帰り道の思い付だったの、明日でも持って来るわね」
「いいえ、私がもらいに行きます、明日でいいので

しょうか？」
「三時以後ならいつでも、私ミス研の前の部屋にいるから、でもミス研の部室わかる？」
「はい、春のキャンバス開放のときお邪魔しました」
「ミス研の前の部屋ね、使われていない教室なのだけどミス研が本なんかを全部運び込んで今では無断借用中、瑤子さんのバッグもそこに置いてるの」
「三時でよろしいでしょうか？」
「いいわ、待ってる、お邪魔してみてよかった、じゃあ」
「あれ永井さんもう帰るのですか？もう少しいてもいいじゃあないですか、おいお茶お茶！」
「こら、男共は黙れって言ったでしょう、でも本当にお茶でも飲んでゆっくりしてよ」
「ありがとう、でも部会の最中でしょう」

「うちの会長怖いでしょう、永井さんとは大違い」
「こら！後で覚悟しろよ！」
「フフフ巴御前ね、M大現文研のお茶ってどんな味かしら、ミス研のお茶は一口飲んだら七転八倒保証つきだけど、でも本当にこれで失礼するわ」

「ここだ、ミステリー研究会と書いてある」
「明かり気をつけて、ガードマンに見られたら面倒、その前、この教室よ」
「おい、本の山だが無いぜ」
「よく探して、どこかにあるはず」
「ねえ、何探してるの？」
「あっ！永井さん、どうしてここへ！」
「あら貴女、今日お邪魔した現文研で拝見したお顔ね、M大の貴女こそどうして？ここT大のミス研の部室よ、私はT大生でミス研の部員だけど」

「永井さん、青山瑤子のバッグ私に譲ってくれない？」
「あああれ、あれは下野咲子さんに渡すと約束したわ、貴女もその場にいたじゃない」
「咲子には私が話しておく、お願い！」
「どう言うこと？こんなに暗くなってから」
「ちょっとわけがあるの、だから」
「それって白い粉のことかしら？」
「えっ！あったの！」
「底の方にくっついてね」
「じゃあ貴女！そうか、気づいてるのね、そう、それならいいわその通りよ」
「おい、よせ！」
「いいじゃないの、ご想像の通りよ、あれは覚醒剤」
「だと思った、でもどうして瑤子さんのバッグに？」

「この人が間違えたのよ、薬の欲しい人は私にお金を払う、私は犬のアクセサリーを渡す、それを付けたバッグを図書館において置くとこの人が中に薬を入れる」
「面倒ね、どうして貴女が直接渡さないの」
「薬を持ち歩くなんて嫌だし、この人しか手に入らないのよ、瑤子、目印の犬とよく似たものをバッグに付けていた、だからこの人、間違えて入れてしまったの」
「そうなの、それで？」
「部室でね、瑤子の隙を見て探したけど見つからなかったの、だからもう瑤子が気づいている、彼女がどう出るかわからないけど変に騒がれたら困ると思って」
「それで瑤子さんの口を…」
「私はそこまでしなくてもと言たの、だけどこの人

が」
「瑤子さん可愛そうに、でもどうやって…」
「永井さん、貴女名探偵ぶってるて噂だけど、わからないの、教えてあげましょうか、口紅にね、毒を仕込んで瑤子のものと取り替えたの、瑤子気づかないで使ったわ、あのクレオパトラに化けるために、自分で塗ったら自分のでは無いことに気づいただろうけど、私が手伝ったからよ、唇に毒を塗ってもすぐに身体には入らないわね、でも唇は思わず舐めたりするでしょう、だからそのうちだんだんと効いて来る、ところが予想より早く効いたの、途中の休憩で、口紅少し直した方がいいわよ、なんて言って、またスティックをすり替えるつもりだったの、でも間に合わなかった」
「ふうん、それでバッグが欲しいのね、中にあるスティックは犯行の証拠品というわけだから」

「そう、バッグはどうでもいいの、二つのもの渡して」
「嫌だと言ったら？」
「貴女鈍いのね、この人学生じゃあないの、瑤子がどうなったかわかるでしょう、細工は私がしたのだけど毒はこの人が用意したの、この人そんなことが簡単に出来る人、ね、渡してくれて、黙っててくれたら何もしないわ、犯罪って多いほどヤバくなることぐらいは知ってるから」
「そう親切なのね、でも止めておく」
「なんですって！そう、じゃあ仕方ない、そうだいいことがある、あのスティックここのどこかにあるのでしょう、探し出して貴女の口に塗ってあげる、唇だけでなく喉の奥までね、すると瑤子に使った手口はバレるかもわからないけど、貴女は何も知らず瑤子の口紅を使ったために哀れにもここで息絶え

たってことになるの」
「それいいアイデアね、でもあまり嬉しくないからお断りするわ、私からも一つ教えてあげるわね、私が名探偵だということ、聞いていてくれてありがとう、名探偵ってね、トリックや謎を解くと得々として話したがるものなの、私にもその癖があるのよ、だから私、よく口から先に生まれたと…あっ、これは余分か…口紅のこと、とっくにわかってたの、だから話したくてうずうずしてたのよ、それをじっと我慢して貴女に話してもらったのなぜだと思う？瑤子さんを殺したのは現文研の誰かだってこともわかってたわ、だから貴女の部室へお邪魔して、貴女をここに招待したの、どんなお方がいらっしゃるかと楽しみにしてたのよ、でも証拠がないでしょう、本人の口から話してもらえば最高の証拠じゃない、原田さんどう？」

「バッチリです！」
声と共に、互いに懐中電灯で照らし合っていた暗い部屋に明かりがパッと点った、小型録音器をかざして原田が立っている。
「原田さんって刑事なの、それから私の彼を紹介するわ」
私は、しゃがんでいた机の後ろから立ち上がった。
「ここは取り囲まれている、迎えのパトカーも用意してあるから乗ってもらおう」
私の合図で、数名の警官がすぐ駆け込んで来た。
「ね、うまく行ったでしょう」
「ああ成功だな」
「恭一、何ニヤニヤしてるの？」
「夕子さん、夕子さんは口から先に生まれたんですか？」

「夕子、いつもながら脱帽だ、毒は口紅からだと初めから気づいていたんだな」
「女性が口にするものって、食べ物と飲み物だけではないのがわかった？フフ、恭一のほっぺにも付いたでしょう」
「そ、それだ！夕子、よくも！」
「フフフ、コスプレって、本当は他人に見せるものじゃないの、変装した人物になりきって自分が楽しむものなのよ、だから私も楽しんだの、シーザーには少々役不足のお方とだったけど」
「このやろう！まあそれはいいとして、あの二人のことだ、二人が教室へ来るとどうしてわかった？」
「そこが名探偵の名探偵たる…なんて言いたい所だけれど、あれは青山瑤子のお母さんが、約束を守る誠実な人だったおかげ」
「うん？」

「瑤子の弟が、わざわざバッグを私に届けに来てくれたの『永井さんと言う人、瑤子のバッグが欲しいと言いながら持たないで帰ってしまった、遅くなってしまったけど持って行ってあげて』とお母さんに頼まれてね」
「何、どう言うことだ？バッグは夕子が持っていたはずだぜ」
「瑤子、同じバッグを二つ持ってたのよ、一つはノートや電子辞書などを入れた登校用、もう一つは化粧セットなどを入れた休日のショッピング用ね、でそのそれぞれにあの狛犬を付けていた、彼女は狛犬の一対どっちも一人で持ってたのよ」
「ふうん」
「私は、署に保管してあるバッグを貰いたいと頼みに行ったの、だから手ぶらで帰ったのだけれど、お母さんは家にあるもう一つのバッグだと思ったの

ね、そこで弟に持たせたわけよ」
「警察は上原と言う準教授を内偵していたのだが、M大を中心に捜査していたから、彼の噂はすぐ耳に入って」
「瑤子は狛犬を両方持っていたのだから直子が準教授の部屋で見たものとは無関係ね、これで上原教授は除外、二つ目のバッグの中に覚醒剤が入ってた、だから事件は覚醒剤絡み、口紅のことを考えると、瑤子のサークルの誰かが関係してるに違いないと思ったの、私も初めはバッグが二つなんて知らなかったからそれまで上原準教授も容疑者の一人にしてたのだけど」
「なるほどな、それであの罠か」
「男が、瑤子の狛犬を目印の犬と間違えて薬を入れたのは登校用、あの女性が部室でそれを取り戻そうと中を探ったのはレジャー用、その日瑤子はコスプ

レのために化粧セットの方を持って来てた、だからいくら探しても見つからない」
「うん、それが瑤子にとっては不運だったわけか」
「そうね、でもこれで事件は無事解決」
「待て、毒入りの口紅と覚醒剤、そんな重要な証拠品を夕子は一人で持ってたのか？」
「フフフ、恭一はそれを言うと思ってたの、この男すっかり警察の毒液に染まってるんだから、見上げたものです警部殿」
「こら、何が毒液だ」
「じゃあヒマラヤの清涼水、でも警部の恋人が証拠隠匿、それを許したのが課長だなんて、どこかへ知られたら確かに問題ね」
「それだ…」
「フフフ、私が大事なシーザー、違った、のび太を困らせると思う、あれ最初から署で保管してあるわ

よ」
「うん？」
「早川さんに鑑定をお願いしていたの、口紅の方は瑤子のバッグが手に入った時に、薬の方も見つけてすぐね、バッグはM大の咲子と言う人に渡したけど、これはいいでしょ、咲子二つあるのに驚いてた、現文研も大変、部員が殺された上に犯人も部員だったなんて、でも巴御前がいるから大丈夫よね」
「何だそれ…？」
「あごめん、話が逸れた、早川さん、すぐ結果を教えてくれたの、でも犯人がわからないのだからすぐ発表しない方がいいと思ってね、これ内緒にしてて、と頼むと『この物質の鑑定は難しく非常に時間がかかる、いまなお正体不明』と鑑定書には書いてあるだって」
「そうか、早川らしい」

「せっかくの青葉温泉、幽霊になったわね、楽しみにしてたのに」
「ああ、だが仕方がない、一人の命が失われたのだから」
「そうよね、あっそうだ、あの大会中止になったけど投票結果を実行委員会が集計したの、一位は誰だったと思う」
「夕子だろう、夕子は確かに凄かった」
「見直したでしょう、でも違うの、一位は直子、私は次点」
「ふうん直子もよかったな、だがそれじゃあ事件が無かったとしても、やはり温泉行きは幽霊じゃないか」
「あのね、直子のあのコスプレ全部私が指導したの、直子を優勝させようと思って」
「うん？どうして」

「私が優勝してもまた貧乏旅行でしょ、まあ交通費と宿泊費は商店街が持ってくれるけど」
「まあな…」
「直子が優勝したらどうなると思う？直子にはまだ彼がいない、だから旅行は家族三人、『私の優勝は夕子先輩のおかげです、先輩も行きましょうよ、もちろん宇野さんもご一緒で』と言うことになるわ、で、直子のお父さん商店街提供の安い宿などに泊ると思う、きっと温泉街最高の旅館よね、そこで私たちも財布を気にしないで豪遊が…」
「あきれた、風が吹いたらなんとやら、いや取らぬ狸の・・か」
「フフフ、恭一本気にしたの？本音はちょっと癪なのよね、直子の可愛さには勝てなかった…直子の仮装は私の指導と言うのは本当よ、でもやはり、トップは私がなるつもりだったの、ねえ、いくら貧乏旅

行でも愛しい誰かさんと二人だけの方が…」

「おい、何か買わそうと思っても、ボーナスまだ出てないぜ」

了

贋作幽霊温泉

http://p.booklog.jp/book/90036

著者 : tontokaimo39
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/90036

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/90036

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ